



連款四片





夫連歌ハ契田大明神の



中よりけくこの三葉よ
 己始つて代と此梅つ今迄
 たりてわそい中津比より原
 至んまりてとる始つ事
 柗との世れま歌ハ詞をた
 たり何さうき事也釋音
 世も出ぬえ所はと四方り
 初らめぬふも才一法花歌
 ときぬ等また也とありく
 法經かりといとと法花
 とこのく諸佛出世の事懐
 こなりぬ經の筆をらるめ

に妙はさうまわ妙とて
言渡のさよらる可也はと
てて柳らさよわ花の紅の
とのほくれをよとてのよ
あつとも可也代らる勅撰集
多といふと古今集もよ
なるは集の類もよ
亦可ち人の心を様として
らりりのことれとてそをかり
言渡とかまよすもららは
花もたさ一人の心を様と
てくといふ可也妙の字より
からりらりりの言渡を

らまりあつと云可也はの字
もたさ一人の心を様と
てくといふ可也妙の字より
花もたさ一人の心を様と
てくといふ可也妙の字より
成なる事なり一人の心を
さまさうとて調を次むる
也といふなりは言るると
つのもり可也の事也は心
とて傳をけらるるも入る
かたなりは言るるとつら
人言渡をその作者一人

おーけいふも連続のたす
たけいふもきつこくしぬり
うの言ふをきりたる上より
神付用付といふ事なり一
うのうちに此神の物を用と
付ると神付といふ也是は
きんた也上のまゝなり一
とあり一用付といふは
の物の名のかりもきんたの字
もかた葉の字なりとをきん
神あり物とて付と用付と
云ふこと紙中とてり但物の名
のありのありのまゝといふもの

厘の字とて付也又詞の
字とてりいふ物の名のま
のありのまゝといふ由の厘の字
とて付とてり一うの
の神用といふ別とてり事
ありのまゝのまゝといふは
取とい物の名とてり調の字
にては利とてりきんたの
わいふといふはきんたの
この取一と事とこの上より
取のう花のう月のうの
とてり事なりとてり
のあり物の初中後中の

初中後年の初中後年
意のち此初の初々風のた
しわもきつはさへ又ちうい
まふをめありちしよじと
かまして心をまことする初
のりちちらわきえしう一人の
めまを尋ねてその里人とわ
ころくちうんとしう初初
中へはきうんあつね事をえ
くしらせく心さつとんそく
胸ちらさきほか解うら
男うほくうらとつひせきい
こしあぬのびさしといつた

初の後世は初中三人の
りしよ初てたうこいつち
よちりひしうはなまうしきい
いあせしあうす中ま中
あつちう事をいひあうた
ふまこまあふちくしてまら
あ中のりち中まのい
へ初ていうと問いありし
人のままひすれおせばい
かまひてのせうそこはさ
我ちうの人のりち面をあげ
は初ちうしちしあいたく
まあ初の中てあはれ

金葉子所記の事の中三乃
通人初てはまゝに記して
初もかういふ事記し
今更らして下すか感うも初ふ
こつりやを記して初う
うしゝるたのまゝして人
子ぬ記をうつく町ありか
感う此事もまゝの世の
理ありていゆるわけは出所を
と一かたを記し初うき
んく岩本に記し初う
初うまゝに記し初う
よりしとんく記し初う

初ういふに記して初う
一筆をうし初うてんを
うしの中の後と初う
初うし初ういふ初う
とていふ事初う初う
の初う初う事の初う神
初う初う初う初う初う
と中三乃の初う初う
初う是乃初う初う初う
と一筆の初う初う初う
初う初う初う初う初う
初う初う初う初う初う
初う初う初う初う初う
初う初う初う初う初う
初う初う初う初う初う

夕々しき我のうらや
らきわさちわしのたよ
うしつらつらと入る
の境も約をとりりち
いさきいさきのうらや
多のやち中なまのいま
ぬきとりわ世のうらや
らんやうつらつら
あまのいさきとめあ
おれまをのゆきを
て中よりをかちける
の中とやせらるる
すいよとせらるる

いさきいさきとめあ
おれまをのゆきを
て中よりをかちける
の中とやせらるる
すいよとせらるる
いさきいさきとめあ
おれまをのゆきを
て中よりをかちける
の中とやせらるる
すいよとせらるる

ちやくぬき垣根の梅雪の雨
うかつ笑あはれとらふま
そとあくはま又ふまをこ
ゆりまよひ一帯ちりあとの
ふりとしり初の中とて年
立ちか胡より山くふすこ
わたりてまうかろりりこ
まのきこしとらふも花の面
影立そいそくうしこしと
々心初の後うり好きの
梅笑牆根のま未久付言
打との所よあまこまより
柳きりりこちたりに本

のちころあまうりたりたり
しをわひさあまこまより
花ちりりりとおやゆるき
の初とてまこく日こく
うにぬきまの初とてま
まよはははり花のまあま
のれとまんとまらこしと
しりゆりこのまも花のま
梅初とて梅よりまあま
まこまとまを中れ中と
中まま花のまらこま
らじりりし山くのわけか
はらまわひまはまこま

夕べの月影いそげぬ影の
雲立ちのりよとくまきくか
よして山風さけしと鳴る
てとと冬よりなりぬとと
所くそより雪打ちちりて
らりも花をそけちりて
さよりとより中此後之程
るのよとよりぬく山く此
あ付いふくよりこち出
しりよとより橋よりといふ
とせしりく此家橋より
山里の花のつひもを
すれ人をほつさよと

り侍を弄れとよを
安んぬと馬よりとをけ
てちりちり人こち我
中らよとよりき後の物
山よりりてとつけき
れよのよりとをといと
年よ掃ちり花よちい
ちりよと物といつす
おれよとよとよりて
まけちよと花らぬ
のちりりかて本
初二夜とちり
しり風のちりき

とらりくさうりちり花をか
さけりく吹りくすまよき
をひつる身かうしりあ
あうまうあかりて尋ね
んあひるまきりさうわじ
後の中とやちり所れり
なをくゆるー花の酒に
こけてたうひりりしを
の中此書を所(嵐)はそ
てじりしき物まきのり
とあうまうくし名あけ
うり(樹)村をささるり
よもあひのじりすしと夕の

われよあひしうしり
のあしくまうり所(花)の
つてことまきりし名あ
の善の善よりよりか
らりも中世これ後のは
中(ま)いり又らあんと
かうあうあうしり中
もりきいりしとまき
も善の風し花とささ
又りしとまきしりり
へりしとまき花あま
しりしとまき死言書
とまきしりりしとまき

てなほい花^{サシ}の常任^{サシ}の
常任と記すり也はとよりを
おきて常任不減のさきを
得作まをとせししたる入
命一妹の月乃九のまを
とて精ら日風涼しくおひし
雲道並にれ初りもすこ
りく三月の世山の屏より
おひけし初物のさきを
あり三月月のとつらり光
菫の葉風をまらして雲が
りくと世中より初のいろを
いさくさつらるを初の中と

中^{サシ}の風よき一を吹く
夕くも世のよきそいおひ
の萩落葉よきれを山の
麻乃きくおひくまらを
なほの世の月乃りりり
あし三つ方とこり一の
とせ七月世のいろりり
すはちむしるわら下ま
なまききくをいし
とまひりつたつを便と
とくおひるおひの
のあり月乃りりり風
おひる世のいろりり

女言りておちゆら月紙中此
知とす考しおふりら月の
一秋二秋のおちりるまきこ
とありしこころいんくあ
りくまきつたて結を何と
おれし秋の日はあまきつら
志いあこりぬくし若月の一
後何うと二秋の身行又
いふくこころを種とてたさ
るまきとちりめつ新道う
とくふいふけまきとい法
あまきとりとち又何名史料
伏見やんましるあちりつ

しそ何うつあつる人
くろくを控陸らくぬて
と秋の初も名のともりま
とくしあつにいとあつ
結とくし明く又秋のま
とこまきしすとあつてら
及るまきつたて結を何と
志いあこりぬくし若月の一
後何うと二秋の身行又
いふくこころを種とてたさ
るまきとちりめつ新道う
とくふいふけまきとい法
あまきとりとち又何名史料
伏見やんましるあちりつ

とから月を中一の後と
也去月のうららけと帯
の元とよりうららけ
とやうら月身と志と
と後乃くうらと也
葉の約本のうららけ
此ら月世と河りうら
時向うら穴ハ新ゆきうら
方りえ一ハ新あり後
中と也本枯と
地時ぬきとこす
りりうらうらあはれと
とまうらうらをうらら

月をさまりし夕何の心
とこまらまてと足物
を洞りうらと新あり
世ん明の新後のねと
也是のうらとま
を乃ねり月秋の新
らりと早とめと
親のあのかととま
月をうららと白と
也妻と卵れしと
くも月ぬのをと
うらま也夕三の
を乃月ま

空より降り給ふ地を又
岩の清水の中を流
新たゆとせしむるを
あり冬たると所はあ
るかられ色ちりけを
おきらるる月つけを
中へさやせし霧の
月と鏡の都とすこの
りり何ふ山何ふあな
夢より月ごまのたりと
水ておほせ又うごの
千原は瀆もそのよふ月
何ふ又わさの竹の美

さ解く春の月何く
と移る程と又うごの
てもり雪れ春の月ごま
世かうく身もへびに
おりに梅こしとよま
月のまをわらわもの
いとほまきとみと感
もぬへし又格と都を
さうさうりわらわの
さう柳をわらわをさ
わらんたもわらわの
しとおきりし中を
袖をひくわらわの

まじうしなまきうれあひ山
もさうまじうしと并と階
にうまきりんきそのめあるる
とうらら木下階からゆま
て降りてんあうい又もあに
曉まきくたきやう舟もきえ
行くて心ほくし此橋のい東
とわくし浦く破のかき
よ和とゆし又しうかす
の事さ浪り漕まぬれめ和
田の原よい定吹風をまう
あのみ和い山より星をたり
こして山の崎もみらぬら

まじうし日の中をくひら又
たけりまきとゆらまき
あうらうし白きれをうと
しんせう人の家長の身
とまきあこのまじく筆
の山崎のあし神やうか
ま宿とまじくしんくあ
まの麻とまじくまあ
根ねこのまじくまあ
あうらうまきあしひい
りねくしんくあまき
しあきせうく行もま
りあまらまきやうま

こゝろをねさかす人しき
いして海あり此等の様と
と雲のちほくぐらひ
一葉のねと如きよそののこ
りてさうりしうしてと
根のゆるりしうの根
葉は梳とじらひも之
とをたうりくむす
とわさるる月とのさうあ
ゆり或は根のうまあゆ
る妙なりし雪の日のあ
れとさゆりし又しとせ
とさうりてさうきとさ

出かるるさうりて
り清きさうりし清くけて漕
舟の新清きこの世れさ
と別なりし船し又と
市とさうりし別し根浦
乃おきに漕きゆり舟あり
候しすさうりしとさうりし
と四乃の合さうりの
とさうりしとさうりし
候きをかりしとさうりし
梅廻とさうりしとさ
て付へしとさうりし
とさうりしとさうりし

の事とておぼしきなり西の國
を別して揚廻かゝる事
多ありり云々述懐神祇尺
教懐舊同毛書つて其十
神を以てし久てその神
もたゞしるのなきやう
なり一點を以てし四を以
らばといふべし但四を以
てし一なりとて世も
しるけしむい皆推考し
すべしといふも自然なり
とていふにけしむり
句とて其もすなり

世より人々後世あり
物也つとありり
揚へて點いも百類の
よきも應すなり
のありきのみ
いなり
教も
なり
のありき
又合
連教
てめ

名号とてこゝへてかゝるの
の句もいふべきは其の
物心の人とならばいふ
うためさるまゝなりてま
わけて然かたなり物ご
連致一字一字てよと
一字二字のちひして合
せし物之物の人の句と
付なり志さへけまとい
くりの上下一字二字に
うさしてめ物之致さ
る師のひりて悲心
をもちて有為情事の

とてりてなり毎なり
花はなまよふをて
は世の人の身なり
う母事とてなり
とて席にて神なり
当事の教事の事なり
慈悲とてこれ中懐
なり一のなり
いふことなり
め又さなりなり
事なりなりなり
物の人の句といふ
は其のなりなり

尚ほまじきやうなうらなひも
 中より申脱を面白く物之
 程もありき致敷うし中より
 ひとと交りあはうする後
 小節りそれを結ぶとすこト
 とのやままにといれ申さ
 とみしうくうくうとちちちち
 いさうなりこそ我作之の
 けりやうまうまうとへん
 のうこころをまへへん
 ししとんとんとへん
 多少とんとんとまうり
 ししとんとんとまうり

したとまきこなりそあうま
 たりくと但胸も致敷うり
 してしてひりりやうまひを
 それとんるのわたり
 ままうととととととと
 九十分のうらな福廻の心
 わり感無曲と杯末の心を
 ちひまうらしてとへん
 終るよまき氣れととと
 といまうらとまへへん
 ちんあうらととととと
 といまき氣れとととと
 へんへん心ととととと

て梅廻らさうまゝとてい
くも終付らるるなりとも同
神のうつまきていひあはらま
事とあらまゝの申すま
言ゆひ可持心事とたり
うしとよとわつたあてり
ぬうよとていひやうに下
のうのり得ありまゝにわよ
まりたりんてわりうをばら
もせこのうまのつゝまゝとて二
五三四五三四三とら事あり
二五三四五六七八九三三三
わきせ又まゝとてまゝやめり

みかえむうぬうの事とて
わくくし得くまぢらゆりお
ちりまゝとて物のぬうを
んくといさうといふ事と
まゝといひまゝとてまゝ
事と物とまゝとてまゝ
お解らるのまゝとてわあり
又まゝとてまゝの意安
まゝといひまゝとてまゝ
まゝといひまゝのまゝとて
山くまのまゝとてまゝ
まゝといひ物のまゝとてまゝ
まゝといひまゝとてまゝ

字といふ字まよひてはるる
波の春いふこと之れくは
つる昔の春を字にほこり
いかりなることよするの
事との今とりのものき
と人さうら又とまの
えも物のあはれもな
とにまてんる前んらと云
字まよひてはるる月と香と
人花と香ととんら我の
感懐りりてのいふ也
月と月と人花と花と
いふといふ字に及まら

なり又人あまの面白
わら事らうていふこと
詮うしるる物こと
感と人さうらとを
と作アキと四を習
をりてさうの事
ういさうびんを
しとの作まよひる
解はるるはるる
こいつらとてはるる
解はるる人さうら
事あまの事とてはる
と習つる事とてはる

思儀乃きえし何者も
為取之扇の感徳并んぬ
赤人のツまりりしと知り
皆くアムらひもみとて
玉聊々卒今もあかひ
の真かつまぬア一守里



